ャム・カレッジの音楽教授にも迎えられる等々という状態であった。そこでかれのアイァランド渡航は，相当の理由があるにはあったのだが，一見いかにも唐突の感をまぬがれないほどのものである(69 ページ以下)。

ペティは軍医監としてもきわめて有能で，功績があったのであるが(71—72 ページ)，54 年 12 月，没収地の実測による地図の作製を主目的とする測量を主宰することになり(107 ページ)，続いて没収地の分配事業を主宰した(125 ページ)。没収地の分配事業を主宰することとなったのは，その測量を主宰したからであるが，測量を主宰することとなったのは，その前年，測量監ワーズリの指揮のもとに行なわれたいわゆる「概括測量」を，ペティが注意ぶかく観察し，その上でその実施方法の誤りを痛烈に批判し，1654 年 9 月にみずからの指揮のもとにアイァランドの「幾何学的な」測量を行なうことを当局に提案したからであった(72—73 ページ)。

この間ペティは，兵士たちから「給与債務証書」を捨値で買い集め，ケリ県その他の地域に広大な土地を取得し，一躍して大土地所有者となった。その後議会へ告発され，公職から斥けられて，一時，失意の人となるのであるが，王政復古時代になると，国王チャールズ 2 世から愛され，ナイトに列せられたばかりでなく，主としてアイァランド関係のさまざまの官職についた。また共和国時代にかれがアイァランドにおいて取得した土地は，国王からあらためて授与され，しかもそれはこの時代を通じてめざましく増大し，ついに 27 万エィカ(約 10 万町歩)にも達し，このようにしてかれは 18 世紀以降におけるウィッグ党の名門ランズダウン侯爵家の始祖になった(149, 152, 167, 3 ページ)。南部イングランドの小さい田舎町の貧しい織元の 3 男坊として生まれ，一時は水夫となり，フランスの海岸に遺棄されたことさえある(上巻 39, 56—57 ページ)ペティとしては，原因はいろいろあったのだが，想像外の栄達といってよかろう。

そしてペティは，さらに『租税貢納論』(1662 年)その他，先年松川教授の手でわが国に紹介された数編の名著を書いて，経済学，財政学，統計学，計量経済学等の分野でも，先駆者的な業績をあげるのである。

松川教授の『ペティ』の下巻は，このような社会的政治的諸事情の変転と，その中でのペティの生活および実際的ならびに学問的業績を，しかも当時の諸事情の変転の——そしてペティの生涯および実際的学問的事業の——の 1 こま 1 こまを区切り，前者に対する後者の関連を追及しつつ，描いている。この書物の上巻が出版されたとき，白杉教授は「著者の博覧渉猟」，「叙述は，利用しうるかぎりの史料と研究とを駆使して，周到であり，しかも簡潔である」と言われたが，この下巻も同様である(『経済研究』第 10 巻第 2 号 184 ページ)。

私は，仕事の関係から，この書物を，ペティにおいて経済学はどこまで作り上げられていたと考えるべきであるか，その経済学は，医学，統計学その他，他の学問や，アイァランド等々のその当時の経済事情の単なる記述や，政治上の意見など，どのようなものから，どのようにして，分化し独立して形成されてきたか，このような経済学の分化独立とその当時の社会的諸事情との間の関係はどのように考えたらよいか，という問題の観点から読んだ。そしてこの問題について考えるための貴重な資料と示唆を与えられたのであるが，しかしこの時代のイギリス史は，いろいろの観点からいって，非常に興味のあるものである。またペティという人物も，決して平凡な人物ではない。単純な経済学者ではなく，単純な学者でさえもなかった。そしてその学問的業績は実に多方面に関連している。だから，松川教授のこのペティ研究は，疑いもなくいろいろな専門の人にとって有益であろう。

〔末　永　茂　喜〕

本　田　創　造

『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』

岩波書店　昭和39年 3 月　vi, 225, 41ページ
〔一橋大学経済研究叢書 15〕

戦後のアメリカ経済史の研究は戦前にくらべて一段と発展したようである。とくに，戦前にわれわれの見ることのできなかった多くの原資料が自由に使えるようになったことが研究の発展のために大いに役立っている。これらの原資料はひとつには地方史研究の資料や，代表的な政治家・商人などの全集・文書などが数多く出版されまた入手できるようになったこと，また他方では政府の歴史的文書およびセンサス類がわれわれの間に揃いはじめたことによって，その使用が可能になりつつある。そこでこの頃では，これらの原資料を駆使しないでは歴史的研究とはいえないというような状況になってきている。

本田創造助教授の近著『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』はこのような資料をふんだんに，しかも批判的に使ったアンティ・ベラム期南部についての新しい本格的研究である。

本書の内容は表題のしめすとうり，南北戦争直前の時期にいたるまでの南部の経済的分析であり，南北戦争を

市民革命として明確に規定している。南北戦争の理解にさいして，セクションやフロンティアなどのきわめてアメリカ的な特殊性を無視してはこれを論ずることはできないけれど，しかし南北戦争は依然として市民革命という普遍的な法則のひとつの発現である——これが著者の本書で主張する基本的な論理である。著者はこの時，産業資本的北部，とプランテーション奴隷制度の南部，と広大な公有地をもつ西部と，この3つのセクションをそのどれもを無視することはできない，といわれながらも，南北戦争の理解のためにはまず南部を研究することが先決であり，北部・西部はいわば二の次であるとされる。著者の言葉をかりていえば，“南北戦争の原因を，いっそう直接的に戦争勃発の局面にしぼって，……問いなおしてみるならば，この場合，北部や西部からのもろもろのインパクトはいわば「外的要因」であり，南部それじたいからのインパクトは「内的要因」と見做すことができる。……戦争勃発の規定的契機はどちらかといえば内的要因にもとめなければならない”(pp. 12—13)。著者はさらに北部・西部を“前提的与件”にすぎないとされ，“南部の内的諸矛盾”の分析・解明が基本であるとされる。これはなかなかにむずかしい問題提起である。著者は北部・西部の重要性を否定しているわけではなく，“全アメリカ的な史的構成”の観点を確認しつつ，3地方の“相互作用”，“有機的なからみ合い”を認めた上で，戦争勃発の規定的契機を探しもとめ，先制攻撃による反革命をしかけた南部をそれであると考えられたのである。

多分，北部や西部の専門的研究者はこの意見にただちには同じないであろう。むしろ，北部・西部——そのうちでも特に北部——と南部との対立の中に，北部産業資本と南部奴隷制寡頭権力の対抗の中に，南北戦争の原因を発見しようとする人も多いのではないだろうか。著者はこの点を大胆に割り切って南部こそ基本だとされる。

著者がここで南部とされるのは，現在の地理的区分での南部とほぼ一致する15州(ミズーリをふくみ，オクラホマをふくまない)で，これは西漸運動の「南部型」を通じて形成された地域である。この広大な地域にはおのずから奴隷制の影響の濃淡があり，いわゆるロウァー・サウスとアッパー・サウスに分かれるが，いずれにせよ，黒人奴隷の非自由的移住とプランテーション制度の移植によって特徴ずけられていた。西漸運動の南部型・北部型の2つのタイプの峻別は，著者の指摘されるとうりきわめて正しい見解である。この見地をすてるならば(北部型における土地投機業の役割を考慮に入れることは別の問題であるが)，南北戦争におけるホームステッド法成立の意義を規定することは不可能になるであろう。

ところで「第2のブルジョア民主主義革命」としての南北戦争を研究しようとするとき，北部と南部の対立を工業的北部と農業的南部との対立としてみることはあやまりである。なぜなら北部は工業の展開が南部よりすぐれていたにしても，農業もまた発展しており，むしろ対比すべきものは南・北農業の質＝歴史的規定性だからである。その見地からいうならば，南部農業の基本的特徴は“プランテーション奴隷制度に基本をおき海外市場めあての商品作物——ステープル・クロップスの重点的生産を基軸にして構築されていた”という点にある。

そこで，以上のような特徴をもつ南部農業の経済構造を分析して，著者は「プランテーション奴隷制的所有」という，いわばひとつの“範疇”をとり出される。その部分は本書の中心的な地位をしめるところであり，その分析は周到細密をきわめているが，「プランテーション奴隷制的所有」の前近代性・非資本主義制はあますところなく証明されている。そして著者は奴隷所有と土地所有との結びつき，その統一的結合関係こそは「プランテーション奴隷制的所有」そのものであり，しかもこの両者がプランターとりわけ大プランターの手中に集中・独占化されていく過程に鋭い注目を向けていられる。

そして最後の節にいたって，“南北戦争へのパースペクティヴ”という副題をもって，南部の経済的諸矛盾の総括が展開される。基本的な(本質決定的)な生産関係としての「プランテーション奴隷制的所有」を中心として，それとならんで，その他のウクラートが存在し，また農業以外の諸関係——南部における綿工業・商業・運送・資金調達・信用・関税などの諸問題に論及され(とくにファクトレッジ・システムについて)，南部経済の全構造を丸彫りにして，その後進性・植民地的従属性を明かにされた。この従属性こそは南部人の危機意識をあおりたて，冒険主義的な先制攻撃＝反革命を決行させた当の基本要因であった——というのが著者の総括である。

本書はきわめて明快な論理によって一貫されており，南部経済史研究における最近のもっとも格調の高い本格的な研究であることは，おそらく何人も異存がないであろう。とくに，「プランテーション奴隷制的所有」の地理的分布についての分析のさい，アーカンソーの奴隷所有者数(1860年)についての第8回センサスのミスプリントの発見と，そのミスプリントを見逃したために生じた多くのアメリカ人・日本人の研究書のなかに生じたあやまり，とくにアーカンソーをロウァー・サウスに入れるか，アッパー・サウスに入れるかについての誤った結論

を鋭くついた箇所は読者につよい感銘を与える。この箇所は註のなかにあてられた細い活字でぎっしり組まれた9ページにのぼる部分で，センサスの数字についてさえ細心の注意をはらって批判的に扱うべきであることを教えられる。(余談であるが，筆者も最新のセンサスである 1959 年農業センサスの一部をテキストにつかって講義をしている中に，学生から数字のつじつまがあわないことを質問されて調べて見たらミスプリントがあることを発見した。*Cf. 1959 Census of Agriculture*, vol. II, p. 1025 の表中の Dairy と Poultry の数字が逆)。

われわれが本書の中に読みとった批判的精神を逆手にもって，本書自体に批判的な眼を向けようとする時に——別にそんなに無理をしてこれだけの労作のありもしないあらをさがす必要はないのだが——それは本書に書かれていることについての批判というよりは，むしろ本書にかかれてないことを注文する結果になるであろう。それは本書の分析の中心におかれている「プランテーション奴隷制度」の外辺の問題である。もっとも，外辺の問題のなかにもいわゆる南部の“ヨーマン”=独立自営農民の問題のように，本書の分析の中心ではないので，比較的簡単にふれられているだけであるのに，その本質があざやかに示されている問題もある。アウズリーたちヴァンダービルド学派が，独立自営の農民層をやや力点をおきすぎて強調しているのに対して，本書は柔軟な態度をしめしつつも，これらの中間層は直接的にはプランテーション奴隷制度の外側にありながら，じっさいはそのくびきのもとにあることを指摘される。まったく正しい指摘である。

この論理をさらにのばして直接的には農業の外側にある製造工業・商業・金融=銀行業などに適用するとどういうことになるであろうか。さきにもふれたように本書の最後の節は南北戦争へのパースペクティヴとして，南部経済の全貌についてのスケッチが与えられている。読者はこの部分が詳説されて南部工業および流通過程の類型的特質が著者によって明かにされるのをのぞんでいる。著者も引用しているジェノヴィーズは南北戦争以前の南部に銀行・商業・信用などの表面的に資本主義的な諸関係が導入されても，これらは南部的生産関係を破壊せずにこれを維持するものであると指摘している。彼によれば，南部の銀行は 19 世紀にイギリスがラテン・アメリカ，インド，エジプトにもちこんだ銀行と同様の機能を果したものであり，北部・西部の銀行と性格を異にしていたと述べている。

本書がこれらの南部の全経済構造の総体に説きおよべば，本書の説得力はさらにいっそう大きくなったことであろう。そしてそれを行なうのは，著者がもっともふさわしい研究者である。なぜなら，本書で著者は1本太い筋の通った論理を展開してみせたからである。著者は本書のはじめに，南北戦争の規定的契機は南部こそがそれだ，とのべられ，さらに別の箇所で——若干の反対意見を予想されつつ——南部はひとつの経済的社会的構成体だといい切っていられる。これはさらに議論を要するところであろうけれども，著者の意のあるところは，南部の類型的特殊性の強調ということであろう。その類型的特質は南部農業だけではなく，“外面的に資本主義的な”諸関係の影響についてこの分析，とくにそれが工業・商業・銀行業などなどを加えた全経済構造の分析によって完全に析出されるであろう。またこれに加えて，著者の分析してみせた市民革命という点についても，北部においては産業革命が市民革命の完成に先行したという特殊性の解明，市民革命直前の北部・西部をふくめての経済的発展の到達段階とその質的・類型的把握を用意しつつ，具体的には，ホームステッド法，モリル関税，ナショナル・バンキング・システムの分析など，これらが——よく見かけるような——単なる成熟・量的発展としてではなく，南部の特殊的社会構造と北部のそれとのたたかいの成果として把えられることが要求されている。本書はその課題からいって，当然これらの諸点までは包摂しないのであるが，これらの研究の方向にたいして正しい軌道を準備している。どうやら書評の域をはずれて，筆者自身の勝手なおねだりになってきて，著者は大迷惑というところであろうが，いずれにせよ，本書は最近のアメリカ経済史学界の大きい収穫といってよいであろう。

最後に技術的な点でひとつだけ注文をのべるならば，多くの統計表のうち州別のものは州名のアルファベット順にならべてあるが，これをロウァー・サウスとアッパー・サウスに区別して並べていただけたら，読者の理解はさらに容易であったであろう。〔鈴　木　圭　介〕

樋　口　午　郎

『銀行理論——銀行信用の理論と再生産』

東洋経済新報社　昭和38年12月刊　259ページ

I　樋口教授の新著『銀行理論』は教授の前著『金融論』(昭和 29 年刊)において教授が展開した均衡的な貨